

ニュースキヤスターの故筑紫哲也さんが、歴代首相との個人的な付き合いについて告白した印象的な文章がある。ジャーナリストの立花隆さんと東大大学院情報学環によるオーラル・ヒストリー・プロジェクトに応じた際の聞き書きだ(『週刊朝日M OOK「筑紫哲也」』に収録)。

朝日新聞の政治記者だった筑紫さんは、もともと政治家やその周辺の知り合いが多かった。そんな中、筑紫さんには、後に首相となった政治家との関係について「自身で引いた線」があったのだという。それが「就任したときに一回だけ手紙を書く」ということだった。

手紙には「おめでとうございます」といったお祝いの言葉と、「あなたはこうした方がいいと思う」というアドバイスの二つを書いた。そして、最後に「これきりです。こちらは権力を監視する側で、これからは遠慮なく、いろいろなることを言う」と記したのだという。

具体的には、三木武夫氏や村山富市氏にワシントンでスピーチする際のアドバイスをした話などがでてくる。国や国民を代表する首相が、きちんとプレゼンテーションしなければならぬ大事な国際的場面なら「こちらがアドバイスするのは許されるのではないか」と語っている。

一方で渡辺恒雄・読売新聞グループ本社会長が、自民党の福田康夫首相と民主党の小沢一郎代表の大連立を仲介しようとした

首相との緊張関係

ことは「感心しない」と言う。その論理は「ジャーナリストは政治家と」すれすれのところで一つの線があるべきで、自分が完全な当事者になるべきではない」ということだった。

筑紫さんは記者クラブ制度や政治記者の体質そのものに批判的で、特定のジャンルにとらわれない異色の記者だった。朝日ジャーナル編集長としての経歴は知られているが「政治部出身」といった堅苦しい雰囲気はなく、むしろ政治には距離を置いているように見えた。

政治家との関わりは難しい。テレビでの鋭いコメントの影で、一歩間違えばジャーナリストとしての信頼に影響しかねない裏話があったことは少し意外に思えた。半面、既成概念にとらわれず、思うところへ大胆に突き進む筑紫さんらしい姿勢とも感じた。

すでになんを発病していた筑紫さんは、「これはいづれかかるときに言わなければならぬ」と覚悟していた」という。ジャーナリストとして一人で考え抜き、自分なりに「線引き」の答えを出した。その評価は、歴史に任せようということだったのだろう。

新聞記者にとって、権力の監視は、民主主義社会を下支えする大きな仕事だ。そのため取材先の懐深く入り込み、一方で適切な批判記事を書く。表舞台の華々しい印象とは違い、裏側では神経を使う人間臭い駆け引きがある。その摩擦が政治家との間にいい緊張関係を生み、書かれた記事の重

みも増すのだろう。

ただ、最近気になるのが、安倍晋三首相とメディアとの関係だ。巨大与党に支えられた安倍政権は、新聞やテレビの批判に対し、とても謙虚に聞き耳を立てているようには見えない。

「かつて聞いた話ではありますが、朝日新聞の幹部が『安倍政権打倒は朝日の社である』と。私もそういう新聞なんだなと思って読むわけです。首相は2月5日の参院予算委員会でこんな答弁をした。

日々の批判記事をいらだたく思うのは分かるが、一国の最高権力者が国会答弁で、特定の新聞社を敵対関係にあると名指するのは感情的過ぎはしないか。しかし、その発言もほとんど新聞記事にならないところを見ると、日常風景なのだろう。

特定秘密保護法成立の強行や、首相の靖国神社参拝など、いくら政権が揺らぐような問題が起きてても内閣支持率はそれほど落ちない。野党が廃れた「自民一強」時代の不思議な雰囲気、政権を歯止めなく増長させている。

政権を仕切る菅義偉官房長官が政府の情報をエサに「記者をコントロールしている」(政府関係者)との嫌な話も聞く。緩んだ緊張関係、筑紫さんのため息が聞こえてきそう。それでも一と言いたい。記者に求められるのは「おかしいものはおかしい」と、書き続けることしかない。萎えずに、あきらめずに。

八由V